

●二人で味わう古典和歌(92)

蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家にあるものは芋の葉にあらし 長忌寸意吉麻呂

『万葉集』巻十六、「蓮の葉」を題として宴席で披露されたとされる歌。「蓮の葉はこういうものだったのか。意吉麻呂の家にあるものはどうやら芋の葉であるらしい」。

「蓮の葉」は当時、美女をイメージさせるものだった。

知識人たちがよく読んでいた唐代の伝奇小説『遊仙窟』などからの影響だとされる。そして「芋の葉」は里芋の葉のこと。大きな楕円形の形、水をはじく特徴が蓮の葉と似ている芋の葉が引き出されているのが読みどころ。家にいる芋の葉は自分の妻をけなして笑いを取りつつ、宴席を共にしている蓮の葉は主役の美しい女性を褒めそやし、ヨイシヨする。自分の名前を歌の中に詠みこんでおもしろおかしくパフォーマンスするのも含めて、一種の宴会芸だったと思われる。

作者の長忌寸意吉麻呂はこうした発想力と瞬発力を求め



られる即興歌で場を湧かせる宴席のスターだった。お酒の入った面々によるさまざま無茶振りにも応えてきたのだろう。ある席では、夜中になって遠くから狐の鳴き声が聞こえてきたというので「狐の声」を、と。さらに近くにある「橋」、宴席に並べられた「食器」や「雑器」をすべて詠みこめというリクエストが出された。無謀と思われるこの要求にも、意吉麻呂はすぐに応えたという。

さし鍋なべに湯沸わかかせ子ども櫛津うしづの檜橋ひなはしより来む狐あに浴む

「さし鍋(食器)に湯を沸かせ皆の者よ。櫛津(奈良県の地名かつ雑器「櫃」が隠されている)の檜の橋を「コム、コム」鳴きながら渡ってくる狐にぶっかけてやるう。無理矢理の感じは否めないけれど、その即興ぶりに場がおおいに湧く様子が想像できる。

しかし芸だとわかりつつも、笑いを取るためだとわかりつつも、もやもやする。その場にはいない妻のことを芋の葉とけなすのも、橋を渡ってくる狐に熱湯をぶっかけるのもやっぱりやめてほしいと思う。

(小島なお)